

鈴木孝夫著「あなたは英語で戦えますか―国際英語とは自分英語である―」 富山房インターナショナル 2011年9月19日刊を読む

日本語を国連の公用語に認めさせることを皮切りとして、世界のインテリに広める

1. (1)日本は大国路線でいくしかない。
(2)これがむしろほとんどの国民の選ぶ道だと思います。
(3)そうならば、国家の対外的ベクトルを外に向かう正(プラス)の方向に変えて、言力政治の第一段としてはまず日本語を国連の公用語に認めさせることを皮切りとして、世界のインテリに広める。
(4)ちょうど日本の一部のインテリが英字新聞を読んだり、英語の本や論文を読むように、ロンドン、パリ、ニューヨーク、モスクワで、日本語で書かれた本や新聞が翻訳ではなくても読めるという知識人を増やして、まだほとんど知られていない日本を世界に知らせ(情報公開)、日本と世界の言語交流の流れを太くすることが、日本の防衛につながると考えるべきです。
2. (1)だから日本はドイツでもフランスでも、これまであまり日本語を学ぶ人の数が多くなかった国々の大学に、日本語科をつくるよう積極的に働きかけるべきです。
(2)お金がないというなら寄付します、ODA(政府開発援助)を使います、と。ODAというのは先進国には使えないということだけけれども、それはなんとでも抜け道はあります。
(3)というのも、軍事超大国化を目指して軍備のために毎年どんどんと予算を増やしている中国に、巨額のODAを与え続け、しかも日本から貰った援助を、なんと中国は気前よくアフリカ諸国やカンボジアに渡して、外交得点を稼いでいるというのは、矛盾もいいところです。
(4)ですから、ODAを使っ^てての日本語の国際普及なんて、いくらでもやれるわけです。
3. (1)今年の2月、私がベルリンのフンボルト大学に行って講演したときに、ドイツがこの前の大戦で日本と組んで連合国と戦ったことを話しました。
(2)だから日本とドイツは旧友だと。
(3)しかも日本は明治以来ドイツの医学、ドイツの工学、ドイツの化学を必死で勉強した。
(4)私も医学部でドイツ語を3年も勉強した。
(5)そういうわけで、今日ドイツ語で講演できるのですよと話した。どちらも戦争に負けたけれども、戦後ドイツは敗戦から立ち上がってヨーロッパの牽引車になり、日本はアジアの牽引車になった。運命が非常に似てるのではないか。
(6)ところで日本はなぜ強いかというと、あなた方ドイツ人を含めた欧米人の蓄積した知識を100年間必死で日本に入れて、そのおかげで相撲用語^{すもう}で言えば二枚腰になった。
(7)日本という国は東洋でもありながら、同時に西洋でもある。

- (8)西と東は永遠に交わらないと言った、あの英国の文豪R・キップリングのことばを日本は見事に覆^{くつがえ}して、東洋でありながら西洋化に成功した。
- (9)このように二枚腰だから日本は強く豊かになった。
- (10)実際今の日本では食べ物、住宅、着る物、そしてあらゆる芸術の分野でも、古来の伝統的なものと西洋的なものが併存している。
- (11)あなた方ももっと豊かで平和な社会になりたいならば、西洋だけではだめで二枚腰になりなさい。
- (12)そのためにもっとドイツの社会を東洋化しなさい、日本化しなさい。
- (13)そのために日本語をもっとやって日本を勉強しなさい、と講演したのです。
- (14)外務省の人はそんなことを言いません。
- (15)ベルリンの大使館からの人もいたけど、渋い顔をしていた。

- 4. (1)このようなわけで、大きな世界戦略の下での近い未来の日本の国家像は、世界が今欧米の事実上の支配影響下にあるという否定し得ない事実を、日本が宿命としてそのまま受け入れるのではなくて、日本の力で世界をなんとかもっと東西の文明のバランスのとれた形に変える、変えられるときがきたという認識の下に再構築されるべきです。
- (2)100年前の日本はアジア、非西欧世界の希望の星だったし、今でもそうなのです。
- (3)このように自分で自分を高く買うかどうかによって、日本人の世界認識が変わり、使命感が生まれてくる。
- (4)そして日本という国も、個人としての日本人もシャンとしてくるのです。

- 5. こういった気宇^{きう}壮大な世界的な視野と見通しの中で、日本の新しい英語教育の方向を考えなければいけない。

[コメント]

日本語を国連の第7番目の公用語にすることを皮切りに、同時に世界のインテリに広めるという意見には大賛成です。これから日本語を世界に広めて参りましょう。

2023年12月31日 林明夫